

東浩紀(2017)『ゲンロン0 観光客の哲学』ゲンロン

A Philosophy of the Tourist by Hiroki Azuma

舛谷 鋭*

MASUTANI, Satoshi

本書は第71回毎日出版文化賞人文・社会部門、第5回ブクログ大賞人文書部門などを受賞し、出版直後の2017年4月には一般書店、大学書店やアマゾンで総合、人文書ランキングの上位を占めた異例の観光関連書である。

第1章「観光」、第2章「政治とその内部」、第3章「二層構造」、第4章「郵便的マルチチュードへ」、からなる第1部「観光客の哲学」は、連続していて議論の完成度も高く、参考文献に付された『観光学入門——ポスト・マス・ツーリズムの観光学——』（2001）の一見「哲学的」な記述よりわかりやすい。しかし、タイトルに（序論）と付された第2部「家族の哲学」は第5章「家族」、第6章「不気味なもの」、第7章「ドフトエスキーの最後の主体」、などは不連続な素描に見える。本稿では第1部を中心に、今日までの観光研究の成果を補足しつつ検討したい。

観光とは何か。これまで観光研究では、主に地理的移動、非日常と楽しみという要素で語られ、それぞれ非移動、日常、あるいは仕事／遊びなどと対照し脱構築が図られてきた。一方、本書は「観光客から始まる新しい（他者の）哲学を構想する」が、帯には「『郵便的』から19年。集大成にして新展開」とあり、著者の「この国における知とは何か」を問う一連の著作の中で位置付けられ、『存在論的、郵便的——ジャック・デリダについて——』（1998。著者名のない文献はすべて東浩紀著、以下同じ）や『一般意志2.0』（2011）の内容を踏まえ、「誤配」「郵便」など著者の常用語について改めて定義されないうらみがある。

本書は哲学する批評家の構想の一部として捉えるべきだが、評者は執筆時期も近く本書のプロトタイプと自称される『弱いつながり 検索ワードを探す旅』（2014、文庫2016）が、手がかりになると考えている。本書の冒頭にもある通り、著者は『弱いつながり』で、村人、旅人、観光客という三分法を提案し「予想外の反響を呼んだ」。以前から観光学部に重要度の高い課題として『弱いつながり』を読ませていたが、醜悪な観光地化や日常との切断などに端的な抵抗を示す学生がいたものの、20前後の「観光客」に強い関心を持つ若者らに概ね理解されていた。ことにモノに触れることの経験の必要性、移動時間のかげのなさ、検索ワードを変える、あるいは新しい欲望が芽生えるのを待つための旅は、リアルで偶然に身をゆだねる弱い絆や福島原発の観光地化とともに相当程度共感されていた。

以上を踏まえ、第1部を見てみよう。第1章は、共同体にこもる「村人」でも、共同体に属さない「旅人」でもなく、横断的な「観光客」の思想的可能性を論じている。観光の担い手である「大衆」は、低次元の動物的な欲求を求め、主体性を欠いた受動的に消費するだけの無責任なこどもに過ぎない。「村人」も「旅人」も、そうした幼稚さを克服したおとなである。経済効果以外、いいところを見つけれない「資本主義と深く結びついた観光のダイナミズムそのもの」をグローバリズムの文脈に置き直すと、観光は格差の拡大と世界の平準化という両面を持ち、後者はおとなにならなくて済む仕組みと言え、観光は必要性和

* 立教大学観光学部・教授

いう「まじめさ」に囚われない不必要さ（ふまじめさ）を原理とする。従来それは本書でも参照されているベンヤミンのフラヌールのなもの、責任あるおとなにならないこと、として語られてきた。原典では犯罪性との関わりが示唆されているが、他者を排斥する「村人」が「旅人」に牛耳られ、第7章の「ドストエフスキーの最後の主体」で論じられている通り、「観光客」はテロリストと表裏一体になりかねない。これらを踏まえ本書では、「村人」（おとな）を超えた「旅人」である世界市民としての「観光客」（こども）によって、「村人」から「家族」を奪い返すことが目指される。おとなにならずに「家族」を持つ、こどものふまじめさを抑圧しない親（不能の父）として「観光客」を構想することが、本書の思想的意義であろう。

1章付論の二次創作は、2010年代から盛んになっているコンテンツツーリズム研究の文脈で捉えたいが、第6章「不気味なもの」の主体論を参照することで明らかになる。1章で論じられたまじめで責任あるおとなとは、6章図3で主体として示されるが、ここで言う「想像的同一化」とは、こどもの主体化であり、それを経ておとなになるとは、「想像的同一化」を抑圧することでもある。第2章「政治とその外部」で説明されるカント／ヘーゲル／シュミットによる即時→対他→国民→世界市民（観光客）という段階は、対他までが「想像的同一化」、国民から世界市民まではさらに高次の「大文字の他者」に対する「象徴的同一化」によって、前段階までを抑圧していく過程と言える。こうした主体化のプロセスは「原作者」と「原作厨」の關係に相等しい。「象徴的同一化」によって「想像的同一化」を抑圧するという主体のあり方は、近代観光の前提でもある大衆消費社会の要請であり、前近代の神という「大文字の他者」への「象徴的同一化」には、一部の特権階級だけが関わり、その他大勢は「想像的同一化」だけを行ってきた。翻って現代の抑圧された主体の回帰による「想像的同一化」は、純粋にキャラクターに対する感情移入だけでなく、自らを「大文字の他者」に模し、従来特権的だった作者の「想像的同一化」に近づき、それを乗っ取ることさえ可能になっている。抑圧を受けず、こ

ものままでいられる二次創作者（観光客）はこのように誕生した。

「森林浴」の創始者の一人である村上和夫は、観光による地域社会変容研究から余暇行動の計量研究ののち、観光の愉しみの質的研究に至り、同時代的に大塚英志『物語消費論——「ビックリマン」の神話学』（1989）や、『動物化するポストモダン——オタクから見た日本社会——』（2001）に注目していた。村上によって予見された二次創作者（観光客）は社会へのアンガージュマン（コミット）を可能にし、自由を作り出す「虚構」の力を持つ。宗教からアニメまで、さまざまな「聖地」の強度を見たとき、読者参加の二次創作は、コト消費の参加型観光であり、石橋正孝が「なぜシャーロック・ホームズは「永遠」なのか——コンテンツツーリズム論序説」（『群像』2017年12月号）で描いたホームズを巡る作者と読者の戦いに示される。コナン・ドイルはキャラクター化して自分の手を離れつつあったホームズを、「作品の登場人物」に戻し、作者としての権威を回復するため、「ライヘンバッハの滝」という現実のエネルギーを借りて殺すことになるが、それによって滝は本当の「聖地」となった。

第2章「政治とその外部」で、本書はルソーを論じた『一般意志2.0』の続編と宣言される。ルソーと同時代人のヴォルテールによるライブニッツ批判は、ライブニッツの「最善説」（オプティミズム）が、神という「大文字の他者」への「象徴的同一化」による「ひとつだけの最善な世界」観に対して、こどもの苦しみに意味（神慮）でなく「まちがい」を、つまり「大文字の他者」に不完全性を見るという「観光客」的なものであり、その方法は「想像的同一化」（あわれみ）の対象を広げる「観光」的なものとなる。最善説は偶然を排するが、神の存在の否定は、それが極端になれば、去勢に快楽を感じるマゾヒストという前段階を経て、世界を無意味と見なすサディストに至り、「この世界しかありえない」というニヒリズムに陥る。前者は「大文字の他者」が失墜して半ばこどもになった「村人」、後者は「大文字の他者」を欠落させた「旅人」と言えよう。

著者は第3章「二層構造」でネグリ、ハートの

「マルチチュード」を本書の「観光客」に近いとしながらも、戦略を欠き、否定神学的であると地下室人張りの口調（第7章）で批判した上で、第4章の『存在論的、郵便的』を踏まえた「郵便的マルチチュード」へと進む。現時点で論理的に一貫する思想は、ナショナリズム（コミュタリアニズム）とグローバリズム（リバタリアニズム）のふたつしかあり得ず、普遍的なりベラリズムが成立しないからこそ、観光客の生み出す誤配が期待されることが記されている。ネグリらの否定神学的マルチチュードはグローバリズムを利用しつつ、解決策としてナショナリズム（友敵理論）に帰着しており、ここまでの読解によれば、その担い手はこどもを装ったおとな（旅人）となる。「象徴的同一化」によるおとなの視点からグローバリズムを肯定するという、自己撞着に堕ちた最善説への地下室人的な苛立ちは隠せない。しかし、これは第2部でリバタリアニズムの先の「不能の父」を観光客的な主体として見出すこと（第7章）と矛盾していないだろうか。

以上、主体と他者を手掛かりに、第2部の内容を繰り入れつつ、主に第1部の読解を試みた。さらに本書については、メンバーを変えて複数回の合評会・研究会を開催したが、「他者」「ノマド」と言ったロマンティックな概念は、産業論起源で即物的な「観光」にすでに持ち込まれ、これまで観光研究のディシプリン構築や観光学博士の養成を担ってきたという前提で、いくつかの異論が示された。殊に参考文献として示されているジョン・アーリ『観光のまなざし』（2014、翻訳書は日本での出版年、以下同じ）やディーン・マキャネル『ザ・ツーリスト——高度近代社会の構造分析——』（2012）について、それぞれの改訂、検討などが踏まえられていないのではないかと、この疑問が呈された。

たとえば、『観光のまなざし』第3版が、初版以来の批判に答え、共著者にラースンを迎え7～9章を加えるなど、観光客のパフォーマンス論に重点を移した意味は本書の「家族」を必然でなく、偶然的と考える主張と無関係ではないだろう。『ザ・ツーリスト』でマキャネルが例示する舞台裏ツアーは、すでに演出された真正性であり、

移動を伴う消費が「誤配」を伴うことはポストマストゥーリズムの中では既知の現象であった。

このように本書の参考文献から注意深く省かれた、たとえば『よくわかる観光社会学』（2011）で一覽されるような今世紀以降のフィールドワークを踏まえた観光社会学の達成が明示的には踏まえられておらず、著者が「商業的で即物的で世俗的」と形容したように、常に「市場化」を前提とした観光およびその研究の負の側面から、「弱いつながり」によって脱出あるいは社会システムの再構築を図ることは説得力を欠く。「観光産業とあまり関係をもたない」と注しているが、全く関係をもたないわけにいかないことに著者は気づいているのではないだろうか。

この点に関しては、観光的文化の役割は肯定されるばかりでなく、ステレオタイプを作り出し、ホスト側地域の生活にインパクトを与え、移動の階級性など、社会関係を分断する問題を含むという、これまで観光研究が取り上げてきた諸問題、たとえば、持続しないコミュニティベースドツーリズム（CBT）の事例は興味深い。

そもそも観光が政治を超越することはあり得るのか。ダークツーリズムのルーツであり、戦争社会学などでも議論されている、戦跡・戦場観光をどう捉えるべきか。気ままな観光はグローバリズムを先導したのでなく、ナショナリズムの残滓として、グローバリズムに方向付けられた。観光は時代状況から独立するどころか、その反映に過ぎない。「国家から国家連合への単線的物語に属さない」ことはない。本書の「観光客性善説」は、観光研究でも多勢を占める観光産業論に利用されかねないという危惧さえ持つ。アーリは『観光のまなざし』第3版の終章で観光の存続について懐疑的な要素を提示し、観光の本質に疑問を投げかけている。こうした態度に比べ、安心安全な観光客を前提とした本書はどうしても主観的かつ楽観的に見えてしまう。

『観光化する社会——観光社会学の理論と応用——』（2008）、『ツーリズムとポストモダン社会——後期近代における観光の両義性——』（2012）などの著者、須藤廣は、現代における観光的なものを考察する観光社会学の論点は、1. 選択と排除

の構造（麻薬作用）、2. 出会いと発見というアイデンティティ効果（覚醒作用）であると説く。アーリは2を踏まえつつ1を見、マキヤーネルは1を踏まえつつ2を強調するが、もっぱら2を強調した本書では、趣味嗜好で取捨選択を行い、ときには名所旧跡さえ排除する現代の観光の一面が、「観光客」の「無責任さ」、「観光客」の持つ「二次創作の想像力」だけでしか説明しきれていないように思われる。

それでも本書が観光研究者にとって、観光現象を明晰に説明し、観光客の思想的な可能性について強い発信力を持って出版されたことの意義は大きい。これまでの観光学のテーマの中でも、万博

への言及、マルチチュードのデモと観光客のスタディツアーなど、魅力的なアイデアにも事欠かない。観光研究は観光学であるのか。制度の中で学部、修士、博士課程まで併せもった我々に残された課題は多い。

付 記

本稿は、村上和夫教授を含む日本観光研究学会研究分科会（観光文学）の活動および、2017年度中に本学部の内外で行われた研究会の内容・意見を踏まえて執筆されたもので、文責は評者にあるが、参加者に謝辞を述べたい。

